経済学三十講

吉田啓一著

吉田啓一著

経済学三十講

泉文堂版

1033-178028-3908

昭和五三年一一月一日第二三刷発行

定価八五〇円

（経済学三十講）

著者　吉田啓一
経済学博士
慶応義塾大学名誉教授

発行者　大坪嘉春

印刷所　東京都千代田区猿楽町二―六―三
松沢印刷株式会社

著者との申合せにより検印省略

発行所　東京都新宿区下落合一―二―一六
株式会社　泉文堂
電話東京(951)九六一〇番
振替東京(5)一三八〇四番
郵便番号　一六一

©吉田啓一　1978
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き著者および出版社の権利の侵害となりますのでその場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

序

本書は初めて経済学を学ぶ諸君のためのテキストとして執筆したものである。従つて表現をできるだけ平易にするとともに、視野を広くし、あらゆる経済学の基礎となるべき知識を伝えんと試みた。近年経済学の急速な進歩とともに専門的な分化が著しく、全く立場や研究方法を異にするものが並び存する有様である。これは初学者にとつて難解であるばかりでなく、却つて混乱に導き、偏つた知識のみを与える虞さえある。体系的に経済学の研究に入らんとする者にとつては、何よりも先ず、すべての経済学の基礎となるべき理論もしくは法則を、充分に理解しなければならぬであろう。本書の特に留意したのもこの点にある。

尚お著者の聊かの経験から、テキストとしての本書は、経済学の基本的な骨格のみを示すものとした。理論の歴史的な展開や実際問題との関連などについては、時に応じて講義中に補足されんことを期待するものである。また本書を三十講としたのは、毎週一―二時間の講義、三十回以上を以て二―四単位とする新制度の要求に応じ、一講を以て毎週の講義に当てられる便宜を考慮したものである。

最後に本書を補う意味に於て、次の二拙著を併読されるならば幸である。

「近代社会思想と経済学説」（昭二九）泉文堂

「経済原論概説」（昭三二）泉文堂

昭和三十二年二月

慶応義塾大学

吉田啓一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

第一部　序　論……三
1　経済とは何か……三
2　国民経済の構造……八
3　経済学とは如何なる学問か……一三
4　経済学の成立と発展……一九
第二部　消　費　論……二七
5　欲望・効用……二七
6　消費の経済的順序……三三
7　需要の法則……三八
8　家計——消費経済單位(一)……四三

9　財政――消費経済單位 (二)……四八
第三部　生　産　論……五五
10　生産とは何か・生産は如何にして行われるか……五五
11　自然（土地）……六一
12　労　働……六六
13　生産手段（資本）……七二
14　経営（企業）――生産経済単位……七七
15　企業の形態と企業集中……八二
16　供給の法則……八九
第四部　交　換　論……九七
17　価　値　論……九七
18　価格の成立 (一)……一〇三
19　価格の成立 (二)……一〇八

20　貨幣の本質と貨幣制度……一二三
21　貨幣の種類……一二〇
22　貨幣価値と物価……一二五
23　インフレーションとデフレーション……一三〇
24　金融と金融機関……一三五
25　配給と配給機関……一四一
第五部　分配論……一四九
26　国民所得と所得の分配……一四九
27　賃銀……一五四
28　地代と準地代……一六〇
29　利子……一六五
30　利潤……一七一

経済学三十講

第一部　序　論

1　経済とは何か

今日「経済」という言葉は、殆んど日常語として使用されているが、それだけに却つて語義の正確さを欠き、人により、時によつてかなり違つた意味に用いられている。[1] しかし経済学を研究する者にとつては、先ず第一にその対象である経済の意義を明確にしておかなければならぬであろう。およそ人間がその生命を維持し、生活を発展させてゆくためには多くの欲求を充たさなければならぬ。例えば食物に対する欲望や、寒暑を凌がんとする欲望などは、これを充たさなければ生命を保つことさえ出来ないであろう。一そう文化的な生活をするためには、便宜品に対する欲望、学問・芸術に対する欲望の如き、多種多様の欲望を充たしてゆかなければならぬことはいうまでもない。しかもこれらの欲望の大部分は、なにか「もの」がなければこれを充たすことができない。食物に対する欲望を充たすためには食物が必要であり、寒さを凌ぎたいという欲望を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

充たすためには衣服が必要である。もちろん欲望のうちには「大声で歌が唄いたい」という欲望のように、これを充たすのに「もの」を必要としない場合もあるが、このような欲望はむしろ稀である。衣食住に関する欲望はいうまでもなく、学問・芸術・宗教等に関する欲望の如く、一見全く「もの」を必要としないように思われるものでも、例えば参考書・実験室・楽器・絵具・礼拝堂等の如き「もの」を必要とする場合が多いのである。

われわれの欲望を充たすのに必要な「もの」は、本来自然界に存在するものではあるが、これを以て欲望を充たすためには、何等か人間の労力が加えられなければならぬのが普通である。太陽熱や空気のように、生活上欠くべからざる「もの」でありながら、殆んど労せず、且つ充分に摂取できるものもあるが、この種のものは極めて稀であつて、他の大部分のものは人間の欲求に比して相対的に稀少である。従つて欲望を充たすのに適当な「もの」を取得するためには、自から採取・加工・育成・運搬等の労働をするか、あるいは相等の対価を支払つてこれを購わなければならぬであろう。要するに人間の欲望の大部分はこれを充たすのに何等かの「もの」を必要とし、これらの「もの」の大部分は人間が何等かの犠牲を払うことによつて初めて取得することができるのである。

なお前記の「もの」とは必ずしも有形の物質のみを指すのではない。汽車・電車の輸送、仕立

屋の業務、医師の治療等の如き無形の役務（Service）もまた直接われわれの欲望を充たすのであるから、ここにいう「もの」の中に包含されなければならぬ。有形・無形を問わず、人間の欲望を充たすことのできる「もの」をすべて財（Goods）という。財のうち太陽熱や空気のように、なんらの労力をも要せずに獲得できるものを自由財といい、なんらかの努力または犠牲を要するものを非自由財という。更に非自由財のうち、他人に譲渡しうるものを、特に経済財（Economic goods）という。経済上に於て問題になるのはこの経済財である。

上述の如く人間がその生活を維持・発展させるためには種々な財を獲得しなければならぬが、かくの如き生活資料を獲得し、使用する一切の行為を経済行為（Economic activity）というのである。しかし人間は常に社会生活を営んでいるものであるから、この経済行為も単独孤立の人間によつて行われることはない。常に社会生活の一部として一定の秩序の下に行われているのである。かくの如く一定の社会組織と秩序との下に行われる経済行為を総称して経済（Economy）というのである。従つて経済は単に人間と自然もしくは財との交互作用であるばかりでなく、同時に人間と人間との交互作用であり、社会的な関係のうちに行われるものであるといわなければならぬ。

人間は種々な欲望を満足させるために――生活を維持・発展させるために――種々な財貨や役

務を消費しなければならず、消費するために生産を行うのであるから、経済は本質的には生産と消費との関係である。このことは自給自足経済の場合を考えれば明白であろう。しかし今日の如く発達した経済組織の下に於ては、地理的・職業的分業によつて極度に専門化された生産が行われている。従つてみずから生産したものと交換に、自己の消費する財貨や役務を獲得しなければならぬ。もちろん今日では財貨と財貨とを直接的交換することは稀であつて、貨幣を仲介として行われるのが普通である。また多数の者が一つの生産に参加している場合には、これに参加した人々の間に生産物の分配を行わなければならぬ。この分配も現代では貨幣を以て行われるのが普通であるから、分配を受けた者はこれによつて自己の消費すべき財貨または役務を購入するのである。このように現代の社会組織の下に於ては、生産と消費との間に、交換及び分配に関する複雑な経済機構が存在する。この関係を充分に考察しなければ、現代の経済現象を理解することはできないであろう。

次に注意しなければならぬことは経済循環の問題である。人間の欲望は反覆的・連続的に生ずるものであるから、これを充たすための財の生産も一回だけで終るものではない。例えば米や麦は毎年作らなければならぬであろうし、道具や家屋も年々消耗しただけを補給してゆかなければならぬであろう。即ち経済行為は連続的に繰返されなければならぬのである。これを便宜上一定

の期間、例えば一年という期間をもつて区切つてみれば、経済は年々循環するとみることができる。この場合実際に於ては、財の生産や消費が必ずしも一年間で完了するものではないから、三年間かかつてでき上るものは一年間に三分の一だけ生産されたものと考え、五年間かかつて消費し尽されるものは、一年間に五分の一だけ消費されたものとみなすのである。

このように経済が毎年繰返されてゆくものと仮定しても、それは必ずしも毎年同じだけ生産し、同じだけ消費するものとは限らぬ。一国の生産量が前年よりも増大し、従つて消費の増加も可能になることもあるし、また反対に生産が減少し、前年と同じ程度の消費ができなくなることもある。前の場合を拡大再生産といい、後の場合を縮小再生産という。これは主として生産に用いられる資本や労働の量によつて左右されるものであるが、その関係については後に述べるであろう。いずれにしてもわれわれは、個々の経済現象を理解するとともに、このような全体としての経済の流れを知ることが必要である。

註

(1) 経済という言葉は、「経済的である」とか「不経済である」とかいうように、しばしば有利もしくは節約という意味に用いられている。また時には単に物質的なもの、金銭的な関係という意味に解されることもある。しかしいずれも経済の意味を正しく且つ充分に示すものではない。

2　国民経済の構造

経済行為を決意し、その一切の成果について責任をとるものを経済主体という。経済主体が常に人間であることはいうまでもないが、それには個人企業に於ける如く、一個の自然人であることもあり、会社、組合、地方団体等の如く多数の人間の集団であることもある。また経済主体は自己の責任に於て経済行為を行うものではあるが、必ずしもみずから実行的行為を行うとは限らない。もちろん個人経営の商工業者や我国の大多数の農家にみられるように、経済主体が同時に実行的行為を行っている場合も少くないが、大企業に於けるが如く、企業者が一切の実行的行為を使用人に委ねているような場合には、両者の区別は明白であって、この場合企業者は経済主体ではあるが、実行的行為の担当者ではないのである。

経済主体とその意思によって支配される実行的行為の担当者との一団を経済単位（Economic unity）という。経済単位は統一的な意思を有し、それぞれ独立的に経済行為を行い得るものであって、いわば国民経済を構成する細胞ともいえるものである。しかしこの経済単位は規模において大小様々である。小は数名の家族または使用人によって組織されているものから、数千、数

万の使用人を擁する大会社の如きもあり、更に地方団体や国家の如き厖大な経済単位もある。またこれらの経済単位を種類から見ると、農業、商工業、交通業というような生産経済を営むものと、家庭、地方団体、国家等の如く、もつぱら消費経済を行うものとに大別することができる。前者を生産経済単位といい、後者を消費経済単位というのである。

先ず生産経済単位についてみると、現代の如き資本主義経済の下に於ては、ほとんどすべての生産は営利を目的として行われているから、今日の生産経済単位はほとんどすべて企業という形態をとつているといつても過言ではないであろう。企業主体も自然人たる個人の場合と、個人の集団である法人の場合とがあるが、いずれにしてもその意思が統一的意思となり、何をどれだけ生産するかを決定し、実行に移すのである。

消費経済単位は消費経済を営む単位であつて、その典型的なものは数名の家族から成る世帯もしくは家庭の消費経済である。特に俸給生活者の家庭などを見れば、それが純然たる消費経済単位であることが明白になるであろう。即ちその家族の家長の意思または家族全員の総意を統一的意思とし、一定の支出を以て何をどれだけ消費すべきかを決定しているのである。農家や中小商工業者の家庭ももちろん一面に於て消費経済単位である。しかしこれらのものは同時に生産経済単位でもあるから幾分明瞭性を欠くが、一家族が二役を演じていると考えればよいであろう。ま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com